



**地域農林経済学会近畿支部
2021 年度大会
第 23 回 摂大農学セミナー**

**主催：地域農林経済学会近畿支部
共催：摂南大学農学部先端アグリ研究所委員会**

**連絡先：摂南大学農学部事務室
SETSUNAN.Obu@josho.ac.jp
072-896-6000**

摂南大学農学部の研究成果を広く知ってもらい、産官学の連携を推進するために**摂大農学セミナー**を開催します。無料・一般公開のセミナーとして、毎月開催していく予定です。多くの方のご参加をお待ちしております。なお、新型コロナウイルスの感染予防のため、本セミナーは当面の間、ライブ配信で開催します。

【開催日時】 2022年1月28日（金）13:20～16:00

【開催方法】 無料・一般公開

【視聴方法】 **Zoom**によるライブ配信

【発信会場】 8号館 8210 教室

【プログラム】

- 13:20～13:30 学会長挨拶
浅見 淳之（京都大学大学院農学研究科）
- 13:30～13:40 **座長解題「ウィズコロナとニューノーマル～都市農業の役割～」**
座長：中塚 華奈（摂南大学農学部食農ビジネス学科）
- 13:40～14:10 「**持続的な発展と一人ひとりが輝けるまちへ**」
伏見 隆（枚方市長）
- 14:10～14:40 「**枚方市のこれからのまちづくり
～オーガニックな暮らしを目指して～**」
熊谷 樹一郎（摂南大学理工学部都市環境工学科）
- 14:40～15:10 「**都市部における体験農園での学びや気づき**」
谷口 葉子（摂南大学農学部食農ビジネス学科）
- 15:10～15:40 「**ここち良いオーガニック社会を創る都市部における里山農業**」
堅島 五兵衛（農園杉・五兵衛 園主）
- 15:40～15:55 質疑応答
- 15:55～16:00 閉会挨拶
小野 雅之（摂南大学農学部食農ビジネス学科 学科長）

オンラインセミナー参加方法

- ・オンラインのライブ配信（Zoom）で開催します。
- ・次のHPよりお申し込みください。
<https://forms.office.com/r/xMdxV2XST5>
- ・メールでの参加申し込みも受け付けます。
- ・お申し込み後、視聴方法についてメールでご連絡いたします。
- ・詳しくは摂南大学農学部 HP(<https://www.setsunan.ac.jp/agri/>)をご覧ください。



第 23 回 摂大農学セミナー市民公開講座
地域農林経済学会近畿支部 2021 年度大会

【座長解題】

ウィズコロナとニューノーマル～都市農業の役割～

中塚華奈（摂南大学農学部食農ビジネス学科）

近年、大規模自然災害・地球温暖化、少子高齢化による生産基盤の脆弱化、地域コミュニティの衰退など、多くの課題に直面するなか、新型コロナウイルスの感染拡大を契機とし、ニューノーマルとよばれるこれまでになかったライフスタイルの確立や、生産・流通・消費のありかたへの変化がみられるようになりました。

グローバルな流通がストップした結果、スーパーマーケットや小売店の棚に欠品がでた経験は、お金があれば自分の欲しいものをいつでも買えるわけではないこと、モノは誰かが創り、運び、提供してくれるから消費できるということなどを私たちに改めて認識させてくれました。特に、命の糧である食べ物が身近なところで入手できる都市農業や直売所の役割の重要性を認識した都市住民は少なくなかったようです。

2050 年を目標とする「みどりの食料システム戦略」では、農林水産業の CO₂ ゼロエミッション化や有機農業への取組拡大により、「持続的な産業基盤の構築」、「国民の豊かな食生活と地域の雇用・所得増大」、「将来にわたり安心して暮らせる地球規模の継承」を実現することが期待されています。経済とは、モノの生産と消費の流れです。経済を車に例えると、生産と消費が車の両輪となり、同じ大きさとスピードで持続的に転がれば、車は前進します。しかし、どちらか一方が大きかったり、回転速度が遅かったりすると、車は踵を返し、前進できないどころか後進してしまいます。計画経済ではない資本主義のなかで、生産と消費のバランスを保つためには、生産者と消費生活者の意識と行動の一致が必要となります。

また、これまでは経済発展と環境負荷軽減とエネルギーや資源の保全は、すべてを同時になしえない「トリレンマ」の関係にあると言われてきました。しかし、時代の変遷とウィズコロナによるニューノーマルにより、環境とともに経済を回復させようとするグリーンリカバリー（緑の復興）とよばれる経済政策が世界各国で提唱されるようになりました。そこに込められたメッセージと、実現をめざす「持続可能な社会」という未来の姿は、私たち全ての人々の暮らしと密接に関わっています。

このたび、地域農林経済学会近畿支部 2021 年度大会主催で第 23 回摂大農学セミナー市民公開講座を「新時代の地域共創と都市農業の役割～こち良いオーガニック社会の実現に向けて～」と題して、開催させていただくことになりました。有機的（オーガニック）とは、「生物同士が結びついて、お互いに作用している様子」を意味します。多種多様な立場を有する生物が共存し、環境に負荷をかけず、こち良い豊かな社会を共創するにあたり、どのような考えが必要か、何ができるのかなど、当キャンパスが位置する大阪府枚方市の産官学の立場のかたから話題を提供していただきます。

【講演要旨】

枚方市では、20年、30年先の発展を目指し、現在、最重要課題である枚方市駅周辺の再整備について、昨年3月に策定した枚方市駅周辺再整備基本計画に基づき、枚方の魅力やまちの価値向上に向け取り組んでいます。また、東部地域の活性化や2025年大阪・関西万博への参画など、市民の皆様が住みたい・住み続けたいと思える賑わい溢れるまちづくりを展開していきます。

①枚方市の概要

枚方市は大阪と京都の中間に位置し、通勤に便利で人気の観光地にもすぐ行けるアクセスの良さが魅力のまちです。西に淀川が流れ、東には緑豊かな生駒山系の山々があります。戦後の大規模な住宅団地の開発により人口が急増し一時は40万人を超え、平成26年4月1日には、全国で43市目の中核市へと移行しました。

2016年には枚方市駅前に関西初のプロジェクトによる新たな商業施設「枚方 T-SITE」がオープンしました。都市的な便利さを有しながらも、江戸時代には京街道の56番目の宿場町として栄えた歴史や自然など多様な魅力を併せ持つまちとして発展を続けています。

②まちの玄関口 枚方市駅周辺の再整備

昨年8月に枚方市駅周辺の再整備のリーディングプロジェクトとして、枚方市総合文化芸術センターがオープンしました。また、枚方市駅北側では市街地再開発事業が進められており、今後、道路や29階建ての建物整備が進められ、商業や業務、住居、ホテル機能などが整備される予定です。このエリアがまちなか交流拠点として、駅直結の新たなまちの価値を創造していくことを期待しています。

一方で、枚方市駅南側については、市役所本庁舎を現在の府民センター方面へ移転させることで、現在のニッパーク岡東中央のみどりや広場機能を高めるとともに、枚方市駅から天野川方面に連続する大空間を創出し、市駅北側と連続して、人が歩いて楽しめる大きな回遊空間を創出していく予定です。

③魅力あふれるまちづくり

枚方市の東部地域は、里山や農地など豊かな自然が広がる大変魅力的な地域です。一方で、人口減少や高齢化が進み、持続的な活性化に向けて地域としての魅力向上や賑わいの創造が課題として挙げられます。来訪者にとって魅力のある地域、居住者にとって快適な空間の創出に向け、枚方市では、地域や民間事業者、大学等とともに、既存のコンテンツの活用や新たなコンテンツの実現を目指していきます。

また、2025年の大阪・関西万博では、国内外から半年間で2,800万人の来場者が予想され、経済効果も2兆円と見込まれており、枚方市にもその効果を波及させたいと考えています。

④枚方市の今後の展望

枚方市では世代にかかわらず、ともに支えあいながら「持続的に発展し、一人ひとりが輝くまち」を、めざすまちの姿に掲げています。枚方の未来を考えると、SDGs や万博、その他にも新しい生活様式をはじめスマートシティやゼロカーボンシティなども重要な要素になります。これらの考えを、みえるまちの形としてあらわしたものが枚方市駅周辺再整備で、これから皆様にも体感していただけるよう取り組みを進めていきます。

枚方市のこれからのまちづくり

～オーガニックな暮らしを目指して～

摂南大学 理工学部 都市環境工学科

熊谷 樹一郎

【講演要旨】

少子高齢化を伴った人口減少に直面する我が国では、まちづくりの考え方も大きく変わろうとしている。これまでのまちづくりでは、増加し続ける人口を受け止めることを目的として都市の開発・整備が進められることが多かったが、現在では都市の個性をどのように活かすかといった点に主眼が置かれている。1980年代からは乱開発に警鐘を促すとともに、Sustainable Development の必要性が指摘されてきた面があり、都市開発を中心としたハード面での整備とソフト面での充足の必要性が指摘されてきたが、近年ではその継続性についての議論が深まっている。その一つの方策として「エリアマネジメント」の取り組みを紹介するとともに、枚方 HUB 協議会での活動を通じたこれからのまちづくりの取り組みについて報告する。

(1) エリアマネジメント

国土交通省によると、「エリアマネジメント」とは地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者などによる主体的な取り組みと定義されている。これは画一的な都市整備が進められがちであったこれまで姿勢に対する変化の意味も込められており、地域の状況や需要、課題などによって実現方法や展開する活動の内容にその地域らしさが反映される。主体となる団体も多様であり、NPO 法人や協議会、まちづくり会社など、それぞれの地で実効性の高くなるスタイルで取り組みが進められている。

(2) 枚方 HUB 協議会

枚方 HUB 協議会は、産学官が連携したまちづくり団体であり、枚方市、摂南大学、関西医科大学、株式会社 morondo、京阪電気鉄道株式会社、京阪ホールディングス株式会社、枚方市駅周辺地区市街地再開発組合、枚方信用金庫、三井住友信託銀行株式会社、株式会社三井住友銀行から成り立っている。現在も構成員への参加希望が多数あり、追加されていく予定である。協議会は未来部会とデザイン部会で構成され、2021年1月に設立からこれまでに3回の部会と3回のワークショップが実施されてきた。2021年12月にはシンポジウムも開催され、貴重な情報が共有されてきている。

(3) これからのまちづくり

枚方 HUB 協議会は 2021 年度官民連携まちなか再生推進事業に採択され、エリアプラットフォームの構築と未来ビジョンの策定を進めているところである。枚方の地での良好な環境を維持し、地域の価値を向上させるには主体的に活動できるプレイヤーが必要であり、農に期待される役割は大きい。今後は、社会実験などを通じた産官学の連携・協働の推進が望まれる。

都市部における体験農園での学びや気づき

摂南大学農学部食農ビジネス学科

准教授 谷口葉子

枚方食農の会は2007年に枚方市杉地区で農業を営む複数名の農家により設立され、体験農園の運営を主な活動内容とする団体です。体験農園は農園杉・五兵衛の敷地内にある農地を使い、約100組の参加者を得て運営されています。一区画当たりの面積は5m×5mであり、5つの畝を立てて、年間で27品種（+オプションで8品種）の野菜を栽培します。

体験農園は一般的な貸農園とは異なり、農家の方々の指導を受けながら野菜づくりを学ぶことのできる農業のカルチャースクールとなっています。参加者は予め用意された栽培計画に従い、月に1～3回程度、講習会に参加しながら自分の区画の野菜づくりを行います。野菜づくりに必要な種苗や資材、農機具はすべて農園側で用意されています。水道水も自由に使うことができます。参加者は講習会に参加するほか、週に1回以上、畑に足を運んで作業を行うことが求められます。また、有機農法により野菜づくりを行うことが決まりとなっており、化学合成農薬や化学肥料の使用は禁止されています。

私は2021年3月から体験農園に参加しています。有機農法による野菜づくりの知識や技術を身につけることが目的でしたが、農園ではそれ以上のものを得ることができたと実感しています。まずは、個々の管理作業のやり方について、「わかっていたつもり」になっていたことが多いと知れたことです。マルチの張り方、トンネルの作り方、ネットの張り方等、言葉としては知っていても、丁寧に教えてもらわなくてはできない作業が多くありました。まずは農作業に備わる多くの実践知を知れたことが、大きな収穫だったと思います。

次に、有機農法による野菜づくりの楽しみが、自分が育てている野菜だけでなく、そこにあるすべての自然との関わりにもあるということです。畑の中の自然は自分が日々働きかけ、何らかの応答を返してくれる自然です。そこでは、普段、自分がただ観察しているだけの一方通行の自然からは得られない何かがあるように感じます。畑の中にはそれぞれに事情があってそこにいる生物たちが互いに複雑な関係性を築いており、それらを知り、知識を生かすことで野菜づくりを有利に進めることができます。畑の土に底なしに奥の深い世界の存在を感じ、それを少しずつ知る喜び・楽しみを味わうことができます。

体験農園でのもう一つの楽しみが他の参加者や講師の方々との交流にあります。普段は教える側の立場であることが多いため、誰かに教わることや自分の成長を喜んでもらえることに新鮮な嬉しさがあります。体験農園に参加する人々は有機農法による野菜づくりという同じ志を持った仲間のような存在で、畑で会うとお互いに声を掛け合い、野菜を窮地から救う方法や夏の農作業で暑さをしのぐ方法等について情報交換したり、世間話をしたりします。自然とのつながりや人とのつながりを通して、自分自身がより強固にこの地に根ざしていくのを感じています。

こち良いオーガニック社会を創る都市部における里山農業

堅島 五兵衛（農園杉・五兵衛 園主）

農の価値と有機循環の里、杉 五兵衛の動画による紹介。

農林業には、その産物をお金に換える私益の部分と、その生産活動を通して国土の保全、空気の浄化、水の浄化涵養、良好な景観形成、生物多様性の保全、文化の伝承などの公益の部分があります。

里山は、持続可能な農の営みの結果として形成され、食料と共にこの公益機能をより多く発揮し、多様な命を育む命のゆりかごです。

里山に身を置くとこち良さを感じるのは、命のゆりかごにいだかれる安心感です。

持続可能な循環型社会の構築には、この里山のちからが不可欠です。

オーガニック本来の目的は、化学肥料や農薬を用いず、水、空気、土壌の汚染を防ぎ、生物多様性を豊かにして、有機の循環を通して生物の共存を図ることです。

この有機の循環を持続させるために、それぞれの立場で「考え、出来ることから実行する」。そのことに「こち良さ」を感じて下さい。

そうすれば「こち良いオーガニック社会」は実現して行きます。

堅島 五兵衛